二〇二五年度

晃華学園中学校

第一回 入学試験問題

【国語】

時間：五〇分
配点：一〇〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の「松尾音々」と「天神くん」（＝「嬉歌ちゃん」）は、同級生である。クラスごとに体育祭のスローガンを決めた時、「音々」の作品が圧倒的多数で代表に選ばれたことをきっかけに、「天神くん」は「音々」を、自分が通っている「五月雨句会」へと誘う。

「ねえ、松尾さんも詠んでみようよ」

そう言うと、またしても強引に、音々を部屋の中央に引っ張っていく。

「無理だって。心の準備、できてない！」

天神くんは聞いてくれない。こういうマイペースなところは、むしろ学校にいるときよりもひどいかもしれない。

「テーマをあらかじめ決める題詠句会の中でも『席題』ってのがあってね。句会当日に発表されたお題に対してみなが即興で句を詠むんだ」

だから事前準備も心の準備もいらないと天神くんは言う。そういうことじゃないと音々は叫びたかったが、気づけば、みんなの輪の中に。

「あら、グッドタイミング！」

一先生が、ポンと手を叩く。

「ちょうどいまから席題を発表するところだったのよ」

音々が参加することはすでに決まっていたかのような空気だ。一先生をはじめ、みなが「ウェルカム」な表情で音々を見つめている。

「今日のお題は、梅雨時の季語としてはベタだけど『虹』にしたわよ」

一先生が高らかにそう宣言すると、全員が「うんうん」と大きくうなずいた。かと思ったら、すぐにみなが「うんうん」と唸りながら、何やら頭を捻っている。

「特に一先生が主催するこの五月雨句会は珍しくてね、即興で思いついた句を、一対一のバトル形式で発表していくんだ」

（中略）

「はい！　じゃあ、一回戦は『三國』ちゃんと『芽良』ちゃんでいきましょう！」

名前を、いや、「俳号」を呼ばれて、ふたりの女性がみんなの「輪」の中心に出てきた。即興俳句バトル、最初の一戦は女性対決のようだ。

『仰ぎ見て　目を落としても　七変化』

先攻の「三國」さんが少し自信なさげに句を詠んだ。

「あれいいの？　虹って言葉ないけれど」

音々の疑問に天神くんが答えようとする前に、審査員として、バトルするふたりの間に立っている一先生が解説をはじめた。

「いいわね～。『虹』の七色を、『七変化』にかけたのね。あえて席題をそのまま使わず、季語も変えてくるなんて、三國ちゃん、うまくなったわね～」

一先生に褒められて、三國さんが照れ臭そうに、［　A　］していた。そうか、そういうやり方もあるのか、と音々は感心した。

「ちなみに、『七変化』も梅雨時の季語で、『紫陽花』のことだよ」

耳元で、そっと天神くんが教えてくれる。

直後、音々の視界が「［　B　］」とまたたいた。あれ、と思い慌てて瞬きをする。すると、さきほどの句を詠んだ三國さんの周りに、①鮮やかな色とりどりの紫陽花が咲いていた。

さっきまで紫陽花なんてなかった。何より、ここは公民館の一室だ。突然花が咲くなんてありえない。驚いて、音々は目をつむる。おそるおそる、もう一度目を開けると、もう七色の紫陽花は消えていた。

「どうしたの？」

急に目をぱちぱちしはじめた音々を不審に思ったのか、天神くんが顔をのぞきこんできた。

「近いって！　目がかゆかっただけだから」

とっさに嘘の言い訳をしたけれど、さっきのはなんだったんだろうと音々は思った。

『虹が立つ　たまには音を　立ててくれ』

後攻の「芽良」さんが詠みあげた句は、「虹」という言葉を使ったもので、さきほどの三國さんのものとはまた違った印象がある。

「うんうん、芽良ちゃんは『［　1　］』を核にしたのね。さっきの三國ちゃんが『［　2　］』に着目したのと対照的で面白いわ」

一先生の賞賛を受けて、芽良さんが自身の句を解説する。虹はいつだって音もなく現れるから、見ると幸せになれると知っていても気づけないことが多い。そんな悔しさを句にしたものだそうだ。

なるほど、言われてみれば虹に音はない。ないものを表現するなんて面白い。

その瞬間、音々の耳元に、「ふわうわん」と空気がふくらんだような、いや、伸びたような、そんな感じの変な音が響いた。

思わず天神くんの顔を見たけれど、「どうした？」という顔をしている。どうやら、音々にしか聞こえていないようだ。音々は変に思って、耳を両手でふさいだ。

その仕草に、またしても天神くんが心配そうな顔をした。

音々は「大丈夫」という表情を返す。この感覚は小さいときにもあったものだ。

おかあさんに絵本を読んでもらっているとき、物語の中の世界が目の前に現れたり、登場人物の声が耳に届いたりした。いや、そういう感覚がしていただけだと少し大きくなってから気がついた。ただの勘違い。幼いながらの思い込みだと。

見え方も聞こえ方も違うけど、あのころと同じような感覚がいま再び起こっている。

一瞬不安になるも、この感覚は決して音々にとって不快なものではない。むしろ物語の世界に入り込むような、いまだと、俳句で詠まれた世界が目の前に現れるような感覚は、神秘的で、ワクワクするものだった。

音々は、両手をそっと自分の左胸に当ててみた。「ドクン、ドクン」と主張しすぎなくらいに鼓動を打っている。他人と交わらないように、いつも教室の端っこで息を殺しているときは「トクントクン」と控えめな音しか立てない音々の心臓が。

「非常にナイスな一回戦だったわよ。じゃあ、次いってみましょうか」

いつの間にか、三國さんと芽良さんのバトルは終わってしまっていた。勝敗はどうなったのだろうか。心臓の音に夢中で音々は結果を聞き逃してしまったようだ。

「はい！」

隣で大きな声がする。天神くんが立ち上がって、高く手を挙げている。音々はそれを見上げながら、自信のあるひとは違うな、と感心していた。

「お！　じゃ、次はそこの中学生ふたりでバトってもらいましょ」
一先生の「中学生ふたり」という言葉に、音々は「おや？」と思う。さきほど参加者を見回したけれど、天神くんと音々以外はみな大人に見えた。もしかしたら大学生とかはいるかもしれないけど、少なくとも中学生は天神くんと音々だけだったように思えたが。
「さあ、行こう、松尾さん！」
天神くんは音々の手を引っ張って輪の中心へ連れていこうとする。
「え、困るよ。人前なんて無理だから！」
「大丈夫、大丈夫～。そんなのすぐに気にならなくなるから」
天神くんは歌うように言いながら、どんどん音々を引っ張っていく。完全にペースを握られてしまった。抵抗するように踏ん張ってみるも、全然ダメだった。気づけば、音々は天神くんと「輪」の真ん中に立っていた。
「ふふふ。お手並み拝見といきましょうか」
どちらが先攻か後攻か決めていなかったふたりはジャンケンをした。結果、音々が先攻に。
沈黙。当然だ。音々は自分が出るなんて思ってもいなかった。だから虹の俳句なんて考えてもいなかった。輪の中心で、音々はいたたまれない気持ちになった。
しかし、不思議と自分に集まっている視線が痛くはなかった。目を合わせたわけではないが、みな、優しい気持ちで音々の句を待っていることが、空気で伝わってきた。

『色のない　虹を見たこと　ありますか』

気づけば「五・七・五」が、「十七音」が、音々のつくった「俳句」が、口から勢いよく放たれていた。
その問いかけにも似た俳句を受けた天神くんは、目を丸くしていた。いや、天神くんだけではない。音々が見回すと、一先生も、さきほど戦っていた三國さんと芽良さんも、その他の大人たちも驚いて、言葉を失っている。
「びっくりした。いま、一瞬、視界から『色』が消えたみたいに感じたよ」
少しの静寂のあと、天神くんがそう口を開いた。

「あら、嬉歌ちゃんも？　ワタシもよ～」
一先生も天神くんと同じような感想を抱いたようだ。他の大人たちも同意するように、うなずいている。
「あなた、いい声ね～。おそらくそれもあって、こんなに②共感性の高い句になったのね」
「いい声」なんて音々は初めて言われた。ただ、それは当たり前かもしれない。普段、両親以外と喋ることなどほとんどないのだから。
「これは強敵ね。嬉歌ちゃん、勝てるかしら？」
③一先生が楽しそうに天神くんのほうを見る。天神くんはそれに笑顔で返すと、直後、真剣な表情になった。

『虹かかる　いってみたいな　よそのくに』

天神くんは、歌うように句を詠んだ。本当にメロディがあるかのように、音々の耳に心地よく、その「十七音」が響き渡る。
どこかで聞いたことがある。そう思った瞬間、音々の耳に「ざざん」と波の音が聞こえた。
天神くんが波打ち際に立っている。ふくらはぎまで海に浸かっている。さっきまで音々のほうを見ていたはずなのに、いまは背を向け、遠い向こう、水平線のほうを見つめている。その背中は、いまにも海の中に進んでいってしまいそうだ。
「④行かないで！　海の向こうに行っちゃだめ！」
気づいたら音々は叫んでいた。その自分の声でハッと我に返る。そこに海はないし、天神くんも音々のほうを向いたままだ。
「あらま、嬉歌ちゃんたら、ほんとどこでもモテるのね～」
一先生がころころとからかうように笑った。音々は自分のしたことが急に恥ずかしくなって、回れ右をした。恥ずかしくて天神くんの顔なんて見られない。
「ふふ。若いっていいわね。さて、句の講評だけど、嬉歌ちゃん、いまのは⑤変化球の『本歌取り』かしら？」
「そのとおりです。本歌取りは本来、先人の歌を取り入れる和歌の技法ですけど、僕は『本歌』となるもののジャンルはもっと広くてもいいんじゃないかなって」
音々の背後で、一先生と天神くんがまるで国語の授業のような話をしている。音々はそれが気になって、こっそり振り返った。
「それで童謡の『うみ』を使ったのね？」

一先生の問いに天神くんがうなずく。そうか、どこかで聞いたことがあるように感じたのは、有名な童謡だったからだ。
「いいわね。短歌と違って十七音しかない俳句で本歌取りがうまくいく例は少ないけれど、それでも意欲的に取り組む姿勢に、俳句の未来を感じたわ」
一先生はそう言うと、「この勝負、嬉歌ちゃんの勝ち！」と天神くんに軍配をあげた。
音々に異論はない。そもそも参加したかったわけでも、勝ちたかったわけでもない。
音々はパチパチパチと事務的に手を叩いて、天神くんの勝利を称えた。
その後も即興俳句バトルで室内は盛り上がった。終了後も、なかなか冷めないその熱気から逃げるように、音々は部屋を出て、公民館の出入り口に立った。
（中略）
「松尾さんにも僕と同じ風景が見えてるんだって、びっくりした」
天神くんが『うみ』の句を詠んだときのことを言っているらしい。
「僕は、あの句の中で、ずっと海の向こうを見てた。その先にある別の国のことを考えてね」
音々の目に映ったあのイメージは、音々の勝手な妄想ではなかったようだ。天神くんの想いがこもった句を聞いたことで、同じ映像を音々も共有したということだろうか。
「あなたはすごく共感性が高いのかもしれないわね～」
一先生も部屋から出てきて、スタスタと歩み寄ってくる。
「しかも、自分の想いも相手に共感させちゃうっていう、すご技も持ってるし」
一先生は音々の口元を指差した。
「向いてると思うわ～。ねえ、嬉歌ちゃん？」
「もちろんですよ。僕は前からそう思ってましたし」
何に向いているというのだろうか。音々を置き去りにして勝手にふたりは話を進める。
「あなた、俳句部に入らない？」
一先生がぐぐっと音々のほうに顔を近づけてくる。髪の毛の両サイドが白髪だったから、おじさんなのかと思っていたけど、顔にそ

こまでシワはない。というか、そもそもこのひとの顔を音々はどこかで見たことがあった。
「『小林先生』、それ、僕が言おうと思ってたやつ」
「もう！　嬉歌ちゃん。ここでは、『一』って呼んでって言ってるでしょ～」
そう、国語の小林一先生だ。音々は思い出した。音々の学年は教えていないが、全校朝礼で見たことがある。そのとき見た小林先生の髪は白髪ではなかったけれども。
「ああ、これ？　学校では染めてるのよ。若白髪なんでワタシは別に恥ずかしくもなんともないんだけど、学年主任の御崎先生が、うるさいから」
一先生、いや、小林先生は音々の視線に気づいたのか、自分の髪をさわりながら、面倒くさそうにそう答えた。
「そんなことより、どう？　俳句部。楽しいわよ～」
「松尾さん、確かいま部活何も入ってなかったよね？」
小林先生と天神くんが交互に音々を勧誘してくる。その圧がすごくて、音々は思わずふたりから視線を逸らしてしまう。
「虹出てる。うっすらだけど、七色の」
ふたりから逸らした視線の先には、とても淡い控えめな虹がかかっていた。音々のつぶやきに、天神くんと小林先生も空を見上げる。
「本当だ。あの虹には色があるんだね、松尾さん」
天神くんはさっきの音々の句のことを言っているのだと気づく。ちゃんと色を感じる。いつもは虹なんて見ても「モノクロ」に見えてしまうくらい感動しないのに。
音々は今日、自分の中に少しだけ明るい「何か」があることを感じていた。それは、梅雨のちょっとした晴れ間みたいなものかもしれないけど、太陽の光が、音々の気持ちに淡い「色」を与えてくれていた。
「俳句部に、体験入部ありますか？」
⑥ついつ口をついて出てきたセリフに、誰よりも音々がいちばん驚いていた。

（百舌涼一『17シーズン　巡るふたりの五七五』）

問一　[A]、[B]に当てはまる言葉は何ですか。次のア～カの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　クルクル　　イ　チカチカ　　ウ　ヒラヒラ　　エ　ざわざわ　　オ　はらはら　　カ　もじもじ

問二　――線部①「鮮やかな～咲いていた」とありますが、これはどのようなことを表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　「虹」と「紫陽花」の共通点に気づき、「音々」はカラフルな虹と紫陽花のイメージを重ねたということ

イ　「七変化」という季語の意味を理解した「音々」の目の前に、紫陽花のイメージが浮かび上がったということ

ウ　どんよりした梅雨に映える紫陽花のイメージが浮かび、「音々」の沈んだ心が晴れて明るくなったということ

エ　「虹」という席題から紫陽花が詠まれたと知り、「音々」には紫陽花のイメージが強く残ったということ

問三　[1]、[2]に当てはまる言葉は何ですか。あてはまる言葉の組み合わせとして次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　1　虹　2　空　　イ　1　見えるもの　2　見えないもの

ウ　1　音　2　色　　エ　1　変わらないもの　2　変わりゆくもの

問四　――線部②「共感性の高い句になった」とありますが、これはどのようなことを表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　けしかけられるように作った「音々」の俳句がさりげなく読み上げられ、句会の参加者たちを和ませたということ

イ　「音々」がとっさに作った俳句が、若々しい発想にあふれており、思いがけず句会の参加者たちが圧倒されたということ

ウ　不本意ながら作った「音々」の俳句が、高度な技巧をほどこしたもので、句会の参加者たちを驚かせたということ

エ　初心者の「音々」が作った俳句が声を通して伝えられ、句会の参加者たちを思わず「音々」の世界に引き込んだということ

問五　――線部③「一先生が～見る」とありますが、この時の「一先生」はどのような気持ちですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　中学生ながら俳句に取り組んできた「嬉歌ちゃん」の地道な努力を認めつつも、句会へ初めて参加した「音々」の俳句の力量を高く評価している

イ　俳句に関心を寄せる中学生同士の対決に立ち会えることを喜びつつも、内心では公平な判定ができるか、不安になっている

ウ　俳句の才能を感じさせる「音々」が現れたことを喜びつつ、「嬉歌ちゃん」がどのような俳句を作って応じるか、この対決を期待を込めて見守っている

エ　なりゆきで句会に参加した「音々」の度胸の良さを認めつつ、場数を踏んでいる「嬉歌ちゃん」が、この対決を制することを予感している

問六　――線部④「行かないで！～行っちゃだめ！」とありますが、このように叫んだ時の「音々」はどのような様子ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　「天神くん」の詠んだ俳句が、「音々」には実際に彼（かれ）が別の世界へ行ってしまうように感じられて、海に向かって進んでいく彼を止めようとした

イ　「天神くん」の詠んだ俳句によって、「音々」は彼に対するひそやかな好意に気づき、「一先生」にからかわれて恥ずかしくなった

ウ　「天神くん」の俳句が席題の「虹」から予想外の広がりを見せたので、「音々」は彼が俳句に大胆（だいたん）な表現技法を取り入れようとしていると感じた

エ　「天神くん」の俳句が歌うように響き渡って、童謡の「うみ」の世界と重なり、幼い頃（ころ）の海でのいやな記憶（きおく）が「音々」によみがえってきた

問七　――線部⑤「変化球の『本歌取り』」とありますが、「嬉歌ちゃん」は具体的にどのようなことをして俳句を作りましたか。三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八　――線部⑥「つい～驚いていた」とありますが、「音々」がこのように感じたのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　「天神くん」や「小林先生」がいる俳句部ならば、自分の気持ちを素直（すなお）に表現し、引きこもりがちな自分の殻（から）を打ち破ることができると気づいたから

イ　今までクラブ活動に参加する気はなかったが、「天神くん」と「小林先生」に勧（すす）められるうちに、俳句部に入部するのが当然だと思うようになっていたから

ウ　「天神くん」に誘われるままに参加した句会で自分の変化に気づいたものの、さらに俳句の世界に関わろうとするとは思っていなかったから

エ　俳句にさほど興味はなかったが、大人が真剣に取り組む句会に参加して奥深（おくぶか）さに気づき、中学生として活動できる俳句部で腕（うで）を磨（みが）こうと思うようになったから

問九　本文を読んだ中学生三人が、登場人物の特徴や関係について、次のような話し合いをしました。後の(1)、(2)に答えなさい。

晃子　「小林先生」と「天神くん」は、学校では俳句部の顧問と部員だけど、「五月雨句会」では、「一先生」、「嬉歌ちゃん」と俳号を使って呼び合っている。

華子　［　Ⅰ　］のが面白いね。

マリ子　「五月雨句会」では、「小林先生」も、普段の学校の先生としての立場から離れて、俳句をたしなむ風流人として振る舞っているように見えるわ。

晃子　二人は「音々」の才能に注目して、俳句部に勧誘して仲間を増やそうとしているね。

華子　「天神くん」が、クラスで体育祭のスローガンを決めた時に、「音々」の存在に気づいたのがきっかけだよね。

晃子　「一先生」は、「音々」が言葉に強く反応したり、言葉で他の人を引き寄せたりする不思議な性質を持っているのを見抜いている。

華子　俳句を詠むとき以外にも、「音々」のセリフをよく見ると、俳句のように［　Ⅱ　］ことに気づくね。

マリ子　本当だ！　やはり「音々」は俳句に向いていると言えるね。

(1)　［　Ⅰ　］に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　同じ趣味を持つ人たちが集まると、場が盛り上がる

イ　学校以外の場所で、先生と生徒が俳句を作る

ウ　様々な人が集う場所だと、新しい自分を発見できる

エ　場所が変わると、相手の呼び方も、関わり方も変わる

(2)　［　Ⅱ　］に当てはまる言葉を、二十字以内で考えて答えなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大学生の頃に京都の田舎で、3畝ほどの小さな田んぼを借りて無農薬の稲づくりをしていた。数人の有志で、車で2時間ほどかけて時々田んぼに行って、その近くにある小さな小屋で寝泊まりして農作業するというもので、田んぼは農家の人から無償で貸してもらっていたので、今考えるとずいぶんと恵まれた体験をさせてもらっていたものだ。そこに集う人々は、学生と、ちょっと怪しげなお兄さんと、ちょっと怪しげなおじさんなどがいたが、夜は酒を飲みながら①他愛もない話をして過ごすのが常だった。ある時、そのちょっと怪しげなお兄さんの一人が「人に迷惑をかけることなんて、何でもない」というようなことを言ったことに、僕はひっかかり「なんで人に迷惑をかけていいんですか？」と、突っかかってしまった。そのお兄さんはちょっと困った顔をして、「いやいや、そういう話じゃないんだけど」みたいな、答えのような答えになってないようなことを言って②お茶を濁し、話を流してしまった。もうずいぶん前の話だが、その時のことは何かずっと心に残っていた。

「人に迷惑をかける」ことと「人に迷惑をかけない」ことの、どっちが良いかと言えば、その答えは明らかなように思える。そうでなくても僕たちは日本人だ。「人様に迷惑をかけないように」を念仏のように唱えて育てられてきた。「人に迷惑をかけることを何とも思わない」と言わんばかりの言葉に、当時の自分は少し憤りを感じたのだと思うが、③今はそのお兄さんが何を言いたかったのか、少しわかるような気もする。

ブフネラという生き物

④ブフネラというアリマキ（アブラムシ）と共生している細菌がいる。アリマキは植物の害虫で師管液を吸汁して生きている。師管液には光合成に由来する糖分が多く含まれているが、タンパク質のもととなるアミノ酸はほとんど含まれておらず、アリマキは常に糖分過多である。ブフネラはそんなアリマキにアミノ酸を合成して与え、その代わりに過分にある糖をもらって生きている。ブフネラとアリマキの共生は細胞内共生という少し特殊な形態で行われており、アリマキは体内に菌細胞という特別な細胞を作り、ブフネラはほぼ一生をその菌細胞の中だけで過ごすことになる。彼らの共生の歴史は長く、共生生活を始めてからすでに2億年になると推定されている。2000年に日本人研究者によって、このブフネラのゲノム配列が決定されたが、その結果は驚くべきものだった。

ブフネラは私たちの腸内にいる大腸菌と近縁の細菌だが、大腸菌と比べると持っている遺伝子の数が約7分の1になっていた。これはアリマキの菌細胞内での長い共生生活の間に、アリマキ側から提供してもらえるものは、自分で作る必要もないよねと、どんどん遺伝子を捨てていった結果と考えられている。私たち人間も、たとえば結婚すると、それまで別々にもっていた洗濯機とかアイロンとか炊飯器とか、二つあっても仕方のないものがたくさん出てきて、人にあげたり捨てたりして処分することがあるが、それと同じようにブフネラは自分の遺伝子を次々と処分してしまい、気づけば2億年の間に遺伝子の数が7分の1になってしまったということらしい。

しかし、そんなブフネラは当然もうアリマキと離れては生きていけない。大腸菌なら人の体内から外に出て、たとえば川でも池の中でも生きていけるが、ブフネラはアリマキの体から取り出すと、自然界では生きていけないし、人工的にどんな栄養素を与えても培養すらできない。自分ひとりでは外敵と戦うことはおろか、自分の細胞膜さえ作れないのである。大学でそんなブフネラの話を紹介すると、［　A　］、という意見が出てくる。ブフネラはアリマキの体外に出てひとりで生きていけない以上もうアリマキの一部であり、一人前の独立した生物として認めることはできないということだ。ブフネラの生態を考えれば、もっともな意見である。

つながりの中で生きる

しかし一方で、果たして「独立して」生きている生物など、本当にいるのだろうか？　とも思う。たとえば人間はどうだろう？　私たちの食べ物は、野菜であれ、肉であれ、⑤他の生物に依存している。実はアリマキと同じで、人間はアミノ酸のいくつかを自分で充分な量作ることができず、他の生物から摂取しなければ生きていけない。人間は肉や魚といった食物からそれらを得ており、ブフネラのように特定の生物に依存しないと生きていけない訳ではもちろんない。ただ、改めて考えてみれば、依存する生物が生きているか死んでいるか、［　1　］特定なものか不特定多数かといったことに、何か本質的な違いがあるだろうか？　また、人間は呼吸によって酸素を得ているが、それは陸上の植物や海の藻類などが光合成をすることで生み出されたものだ。つまり食物にせよ、それに含まれるアミノ酸にせよ、呼吸のための酸素にせよ、それらはすべて他の生物の存在に依存している。

そう私たちは、牛や豚やニワトリに、迷惑をかけながら生きている。それが私たちの本当の姿である。そしてそれは程度の差こそあれ、人間だけでなく現在この地球上に存在するすべての生物に共通する姿と言ってよい。［　2　］他の生物を捕食することのない植物であっても、光合成に必要な二酸化炭素は、他の生物の呼気によって大気中に供給されている。また植物の多くは菌根菌という共生菌の

存在がなければ、土から十分な養分を吸収することができない。決して〝独立して〟生きている訳ではないのだ。この世界は、すべてを完璧にこなし、他の生物の助けなど必要のない生き物たちが集まってできているのではなく、それ単独では生きていけない、不完全でいびつな生き物で溢れている。そして、それらがお互い補い合い、つながって全体の存在を可能にしている。それが「生命」の本当の姿である。

そして⑥人間社会もその縮図である。周囲を見渡せば、植物のように基本的には多くのことを自分でこなす独立型の人もいれば、他人の助けがなければ生きていけないような従属型というか、寄生的な人たちもいる。そんな寄生的な人たちは一般的に言えば「迷惑」な存在だろうし、自分のことくらい自分でやって欲しいと思うのが人情である。しかし、この世からすべての「迷惑」がなくなれば、より良い世界になるかと言えば、必ずしもそうではないと、今は思う。

日本では「人様に迷惑をかけないように」と教えられて育つが、インドでは「お前は人に迷惑かけて生きているのだから、人のことも許してあげなさい」と教えられるそうだ。それは社会というものが、そういった双方向の「迷惑」を介してつながっていることを教えてくれている。何かより豊かな世界観ではないだろうか。

そうなのだ。もらう側に喜びがあれば、実は与える側にも喜びはある。親子関係などは、その最たる例だろう。その関係が強制や過度に一方的なものでない限り、「迷惑」がまったくない世界より、より豊かで喜びに満ちた世界が「迷惑」により生まれてくる可能性はあるのだと思う。あの怪しげなお兄さんはそういうことを言いたかったのだろう。

a

完全な球体は、完璧で美しいものである。しかし、もしそこに欠点があるとしたら、それは完璧で何の助けも要らないこと、つまりそれ以上に良くなることが難しいことではないかと思ったりもする。人に迷惑をかけないようにと、いろんなことを予測、計算してすべてを完璧にこなすことは、何か世界を閉じてしまうようなことにつながっている。外からの風は、すきまがあるから吹いてくる。たとえば人の助けであったり、運のようなものであっても、すべてをコントロールして世界を閉じてしまっては、やってくる余地がない。

だから完全な球体だけの世界は、組み合わせもなにもない。ただ多数の球体が存在しているだけである。いびつな形のものがたくさ

んあることで、それらを組み合わせた「新たな形」ができてくる。【Ⅰ】時にそれは一つのパーツからは想像もできないような複雑で美しいものとなる。【Ⅱ】世界を見渡せば、存外そんなことってあるのだと思う。【Ⅲ】だから、この世界には不完全でいびつな生き物ばかりが揃っているのだ。【Ⅳ】なんかそんなふうには、思えてこないだろうか？

（中屋敷均『わからない世界と向き合うために』）

問一　――線部①「他愛もない」、②「お茶を濁し」の語句の意味は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「他愛もない」
- ア　あまり面白くない
- イ　まとまりがない
- ウ　気を遣うことがない
- エ　おおげさで現実味がない

②「お茶を濁し」
- ア　周りに意見を求め
- イ　強く主張せずに
- ウ　急に話題を変え
- エ　適当にごまかし

問二　――線部③「今は～言いたかったのか」とありますが、「お兄さん」が言いたかったことは何だと筆者は考えていますか。「～ということ。」という形でわかりやすく説明しなさい。ただし、「～」の部分は六十字以内とします。

問三　――線部④「ブフネラという～細菌がいる」とありますが、この共生の結果、ブフネラにはどのようなことが起こっていましたか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア　効率よく細胞膜を作るようになっていた
- イ　糖分を合成できるようになっていた
- ウ　遺伝子の数が大幅に減っていた
- エ　アミノ酸を合成できなくなっていた

問四 [A] に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ブフネラは典型的な細菌である
イ ブフネラはもう生物じゃない
ウ アリマキはひとりで生きていけない
エ アリマキはブフネラから独立している

問五 ――線部⑤「他の～依存している」とありますが、このような関係に**当てはまらないもの**はどれですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ブフネラはアリマキから糖をもらっている
イ ブフネラはアリマキにアミノ酸を与えている
ウ 人間はすべてのアミノ酸を他の生物からもらっている
エ 人間は植物や藻類から酸素をもらっている

問六 [1]、[2] に当てはまる言葉は何ですか。次のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ところで　イ あるいは　ウ なぜなら　エ しかし　オ たとえ

問七 ――線部⑥「人間社会も～縮図である」とありますが、どういうことを言おうとしていますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間社会も子供の頃は一方的に世話をしてもらうだけであり、社会にとって大きな負担であるということ
イ 人間社会でも人と人とが支え合っているように、他の生物たちが互いに関わり合っているということ
ウ 人間も不完全な者同士がお互いに助け合うことで、社会全体が成り立っているということ
エ 他の生物からアミノ酸を摂取して生きているように、人間社会は他の生物が支えているということ

問八 [a] に当てはまる見出しは何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア **孤立(こりつ)した世界**　イ **変わらない世界**　ウ **不安定な世界**　エ **閉じない世界**

問九　次の一文は問題文から脱落(だつらく)したものですが、これを問題文に戻(もど)すには、どこが最も適当ですか。この一文を戻す場所を、問題文中の【Ⅰ】～【Ⅳ】の中から選び、記号で答えなさい。

【脱落文】世界の謎(なぞ)が一つ解けた。

三　次の①～⑦の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 新たな問題がハセイする
② 食事をカンベンに済ます
③ 多数決をトる
④ 感動的なマクギれとなった
⑤ 店のカンバンを見る
⑥ 花粉がヒサンする
⑦ キショウテンケツの構成を考える